紀伊國名所圖会 巻之下

海士郡

内閣文庫
番號 和 8666
冊數 23 (5)
函號 176 14

内閣文庫
和書
類
八六六六號
二三冊
一七六函
一架

綴じ部（喉部分）の文字など開きが不鮮明な箇所あり

国立公文書館
National Archives of Japan

紀伊國名所圖會巻之三下

善導寺（紀州三人像の一人俗人なり）　住吉神社
栄谷観音　諏訪神社
宇佐八幡宮　国主神社
姥櫻　貴志甚兵衛焼
住吉神社　八幡宮社
和田千軒　慶善光寺
極楽寺　田中神社
南海神社　萬福寺
儀乃浦（一名浦）　二里ヶ濱
十輪寺（今名劉寺と云ふ皿の寺）　古屋の泊
伽陀寺　西福寺（弁財天社）
妙観八幡宮　弁財天社

梶取總持寺
栄谷行宮
宗国の松
大歳神社
稲荷神社
紀通寺
紀月楼跡
八幡神社
春日神社
楊枝の井
常行寺
迎之坂

経蔵（法然上人の御自刻の釈迦如来大師色形の御影）
名宮八幡宮
湯殿院
北之山の浦
松江（法利貝を多く産出す）
春日神社
寂光院
名物糸切餅
光福寺
潮入橋
弓国山
春日神社

称念寺　乃弥陀寺　光源寺
御門の井　八王子橋　八王子山
運筆井　紀之屋　紀之屋
形見浦　形見山　形見山
浅沙神社　祝河金　御一殿　伊勢　伊勢　丸倍子掘石　御馬所　潮石　文庫　私布勢圖
中言神社　行幸堂　昆沙門堂　昆沙門堂　新田稲荷　古城跡
友ヶ浦　地の浦小名　沖の浦小名　乃ヶ宮　御供所　鐘楼門
紀念寺　序品窟　紀念寺　序品窟　池　池　神嶋　五ヶ所嶺
八ヶ瀬　萩ヶ瀬　小所七度濱　飽浦　阿仏山　小中山　淵濱濱　八幡宮　鬼神窟
道祖神　深山　報恩講寺　大川社　妙見社
鳳光大師教化の圖

光明山善導寺

○服檀弥陀三尊の御本尊　西山派惣持寺に屬す　○本尊阿弥陀如來　座像一尺六寸

上人の作なりと伝ふ　ふるび寺にて寺にとゝまるしるく

○親鸞上人御自作の像　長さ八寸　○上人の杖　自作にして杖をたゞさゝる鞋

と宗祖御化身なりと辛苦の御姿　尤珍しく

○鎮守天満宮　自筆の御

火中にまぬかれる霊像なり

當山は皇二百代後圓融天皇の時代永和四年妙福光融

上人の開基にして當寺門廣莫の大仏場なりこゝに始

祖上人の俗姓とあるは上人の父い利根

の国某なりやいなる英雄の士なりしが初老のころまでもい

まだ一子もなれば夫婦相ともにこゝろかこちをひた

親鸞大士に祈願して対面さしに悔るこれ有り後に信者の

まう特むあるべしいつの母公たるべきなりそなるに

貞和五年の秋容貌端正の男子あまたうけぬさてはわれ父母
の恨び大かさすれば唯掌中の珠のごく愛るいろうきてあ
さゆうざるをけう是上人の出世るう上人初めて化あるに世の
人の戯をにも合掌頂礼して謹ふたい必ず奥聖と仰するの
れりむきあう及る人寄異ることもあるうふ父利根君を
文和四年京師の礼に就ふたに南都正平十年小原寺にいるのとき是よう上人
きあるこ子ようる母公の胎を養ふけ後ふ九歳にあうあひ
ふ父君の大祥忌なるとび上人未だ幼なくまして母も母
公ふもうい父の善授と吊らんと出家得道にたいすーと
ひとちんたもひーうごも母公ふてこ是ゆうーあうひば
かれうだんして字く二年月を送るうに光陰早くもめぐ
まちく又ようや七週忌とぞあい上人の志願弥切なり康安
元年に歳二七にして月出家妻郡にいと村ある普光山若寺

誦寺に投して名光法師の後生と成たまうりて上人寺法と
惜こ愛雪の窓に心ふてこしあひーうび未学ぶくあうぶして最倍
に学て度数の大綱悟をぞたうとうと法国光法師やうく一つ
条浄土の秘要を授け四頃佛戒の血脈ふたうえ祖法然
上人より九世の正流西山門の珠梁とうあうあうて至く
乃ち伽藍造立の願ふたうーふ法ふに拾歴してその地を
求めうあひーが出ふるあて 寺創の地いまはより五六丁辰巳の方 一宇と
造建しー道俗ふ集めーはる永不失の後法ーとあやふに益
の利生ありうーざうーうに堂を近の美勝其こるる地とまうさい第
の麻くうごくー是の拾ーうごくふに別院と号く 来迎院 三泉菴
利貞菴 宗福寺 若は寺 法蔵寺 はの別院 教化よりるの其うどふ
ちーびさうう盤昌ようけうるわうー名光法師退隠よりて
師弟の空ーにまーにたまうセて後ふー普光山の第三世ふ住

若達寺
若木天社
栄若観音
栄若八幡社
諏訪神社
八幡社
国之社
大歳社
カラ山

しかありけるが終に正長元年三月廿九日法臈八十一にして寂
生をとげ玉ふ其後住持の円山明秀光雲上人も
ふたゝび堂をめぐらさんとすれども終に起る高楼ありしが
漸く廃頽れおよび終に天正の兵火に古の什宝までも
ことごとく焼失し今纔に存するものも多くは後に作りて
加へ補ひぬるものなりとぞ
○什宝 善導大師御自筆の名号 此御名号によりて当寺を岩導寺と号するなりとぞ
住吉神社 梶原村にあり 当所の神二座 勝手明神 子守明神 一村の産神にして例祭
毎歳六月晦日
受陽山知足院總持寺
本尊阿弥陀如来
梶原村にあり浄土鎮西派の檀林七ケ寺の其一にして末寺八十余ケ寺あつて末合して二百八十余年なり 座像長ケ六尺仏工浄雲の作にして白毫に仏舎利を嵌る 是より先に七尺立像の阿弥陀如来を安じて本尊とせしが人の作る所にあらずと当山十四世信誉上人此像を拝して壇上に偏羅したる人は偏まのあたりに上人の[illegible]と[illegible]て其像をかしこみ[illegible]すると[illegible]

弘く行はれ しかるに中興古白上人寂後の其像の脇[illegible]に[illegible]せしを[illegible] 今の本尊を新調して其像の胎内に安置せしとぞ
抑当山を開きし人は人皇一百二代後花園院帝寛正
二年に建立ありしと開祖を明秀光雲上人
なり元は上人の俗姓はかづめ氏にて村上天皇第七
の皇子具平親王より六代の裔孫従二位右大臣の末
葉赤松播磨守則村が息信濃守範資が第二
の子なり則村は世々播州の豪族にして佐用
荘赤松に居し風に禅学を参じて出離を
し円心と号す是師は上人をいとけなき時より
深く浄土に帰し禅ぶりの夫を弁知せん
仏師一の傍どのまゝにて大念仏修の作をとしく
あそび年に偈頌のたのしみに実に鼓堂
用のたまひ詠して彼にしたがふ事のたまひ

梶取總持寺

初春遊總持寺

祇林雨散後杏逕行人黄
雀啣花度緑楊帶露新苔
深金跡没樹密鳥聲頻幾
歳投簪客底憐此地春

紀藩　梁井清洲

久英

豐調

魚潛

四方に諸こくにさぎやうの名をうつ賞
国有国郡ごとに十八箇の梵刹ぞうちふ
きやうこくに福しのちる菩提寺にきてちゆしたが
ゆく尚境にてこたまひ曳ひたまへとこの山の
さんこくに床のえで仏坊ふ立こちうひこの人ゆう吾法美
後世ふおるる成ひば去のひ生ゆるゆるび枝葉ふ生ばべ
しとあるしふぶさこの枝ぶ経ざるふ前に芽を
去ゆうじゆうあくにこく枝葉ゆくしてさうへ花
蘂繚郁とこくこちうこう後人去ばふ名ばうく
杖ざこくこくさまば上人の法徳非のこと去にはがし
実にも拾ふる樹ゆもいるこくにをゆく草創あうし昊
切ゆうわび来ゆ然の宝ゆ教大うこうこ一昊九句ゆあうごこと
法幢はごとうたたこく宝門の桃象学道の薬鬱こく

ふ雲集ば三学ふ乃大檀林なりゆ一ゆた後ふ法隆
正親町院乃両帝去たりふ勅ごんの綸旨ふなりへこゆ
宮手ふ命ぢこうる去うのこちこだ代く
国主の寄ちこたこくこゆるよこふし寛徳の冥巻
ようつまふ仏んめんより法ぐ宗風乃光深日くにあたこうる
○什寶○畫像弥陀如来 恵心僧都の作にしてたしかめ
文禄ろうろう新ふ法郎御法印ふ絵七母のぐいのたんどんまのこと
百ここ仏りくこまとほくのひ弟子ふ作ふろこころにしくこ
わりく作りんふのりゆうもまんあ〜たるふるさうふしていうる
あくごふふうたしゆしかうたうもまんじうにいうこくひとくびまん
ふわんやずとこうこ国君乃崇敬にうう帰とうて義経公あこなるこ
○元祖法然上人真影乃金打こ題○元祖大師色
形こ御影○去の外寺寛牧巻とふにいと屋
あ〜ぶ

宗固の松　貴志村より小倉山上にあり　○勝固のゝ浅野家の老上田宗固なる人世にもきこえし英雄にして武道の流の道ふも暗からしとやこゝの菊株のゝふ手だゝ一株の松と梅くゝふ其真操の賞ゝ迄愛の樹なりゝぞ

與諸子遊榮谷分題賦得冬嶺孤松　詩意咏宗固松　宗固松在葛嶺西梅村上

祇南海

矯矯嶺頭樹。亭亭天外條。根元在僻境。名獨自前朝。
偃蓋雲常抱。貞操霜不凋。英雄亦陳跡。萬古望岩嶢。

北固山碧巖院　北村にあり　本尊観世音　作者不詳

尚ちの吹上御林寺　央山和尚の開基にして和当彼所を退院のゝち遠ふさくに住ゝる是外終焉の地也○尚寺に姥桜乃大樹数株ありて孫生の枝いつゝく壮観ゝゝ遠近の遊人黒雲突日くゝに樹下ふゝゆるゝと云ふ実園の名花なり

唐人道本カ
蒲鳴州ニ本邦ノ
櫻ヲ詠スル詩一
東来初見此花奇
無限春叢讓白眉
的皪瞳珠三百斛玲
瓏玉樹萬千枝何妨
穠李先春艶不與寒
梅遜雪枝若使短檠
裡種清光多似往閑時

貴志猿引
の圖
光廣

山手白人
江戸 五中
二木

○桜樹ひとり吾日本にのみ生ずる本にして支那にもなしとぞ。されどこれ文温公の詩にも桜桃の詩ありるよりのち花の珠をつらねたるよりのち桜桃市とよぶ。詩人のほめ愛でたる人桜の盆栽とあまたそのうえてたのしみ賞する。くるやうこと吾邦の風土にあはざるの樹なれども来舶のほ人桜の盆栽とあまたそのうえてたのしみ賞する。中にもむかしさくらいこの花寺とよびて三井寺のたぐひにて花のころ花ざかりとうれいるるべし。淀川のほとりに桜の花をだに愛でもてあそぶ。とうるの字のこころにふさはしもそれ花とうるにあらずと雖ども桜の花をとうるにあらずと雖ども桜の実の酸こそ。その酸味を絶ちがたく疑とうるの世よりうるてしも唯庚出の桜の実の酸こそ。その酸味を絶ちがたく疑とうるの世よりうるてしも唯

春日遊碧巖山寺途中口編　祇南海

行吟芳草地。遥訪白蓮宮。野老乗晴屐。溪舟得雨通。菜花薫正午。麥浪畳微風。留飲北山下。宛然図画中。

泊岩殿精舎得寺宮

吟行北山下。渡水多勝事。迴登翠生衣。幽巖花繞寺。雲夏溪蛙園。風部山鶯議。喜逢晴明日。卯天雲無痕。

栄行高豆

若宮八幡宮

岸村行宮

○莊栄谷村にあり○續日本紀曰天平神護元年冬十月癸未還到海部郡岸村行宮同甲申到和泉国日根郡深日行宮壬時西方暗暝異常風雨紀伊國守小野朝臣小贄從此而還詔賜絶二千疋綿二百屯[illegible]大和国に肉五[illegible]泉[illegible]

猴猿山観音寺

○村にあり○日本猴[illegible]吹上宮宣寺に屬に[illegible]

猿貴志畏兵衛

[illegible]

本尊十一面千世音菩薩

作不詳

[illegible]

本尊八幡社

[illegible]

麻[illegible]

八幡宮（本在莊本村の）祭る神三座（誉田別尊 姫大神 神功皇后）本在莊の産神にして

例年毎年八月十五日○當社いりと由縁ある宮居なり〻祝宦

仕奉たる家ゝ嘉慶應永永享の間平氏盛前豊采守巻盛

中務永盛直ゝ代代寄附の帖数多あるまゝ古〻に巻表ゝ掲る

ところの額なりとそ是を藏せり代〻ゝ小野道風の筆なる

正なりとさもあるべし尚ほ藏名〻匿の賜ゝ拵くふさし改め

たるゝ等ゝ長二寸と記り其方く代〻なるとおりへ唯八幡宮

のこの字と額ゝ其初風雨に剥蝕せんとゝ外皮とゝく

字の上代〻なるゝ今いとまて縁いとゞく結のあとゝなりとゝ文

字いかしも換ゝなるとゝ陽ゝてあゝやうなりく其運

筆をこんるゝ法頂古雅宜たる跡うゝひたりのく盛中案以

降天下干戈の衢となり世ゝ名〻なる神社佛閣ゝ生く兵火ゝ

羅ゝとく代〻の重寶珍宝焼亡せざるの失稀なり今この

本額のごとく明〻なるとゝ豊幸の甚多〻いなゝしんや拵ゝ

十種ゝ摩ゝ耳比摩利帖ゝのかと用ひたる凡海内ゝ長せりとゝ

ゝも物ゝ遺漏を免まんゝ嗚呼汎ゝ浪ゝ遺賢ゝとゝ

とゝく好古の士のゝあ其宿図とゝ出ん

古額ゝの圖

小野道風筆

長二尺四寸五分
横巾尺八寸五分

葛城山

海士名草那賀伊都の四郡に亘りて北の方にそびゆる山はみな葛城の峯つゞきなり紀伊河内の境二上ケ嶽に至るまで凡そ三十里におよぶ○西の方撫養淡路島までみえ四方みわたしてよろしき所なり かゝる所に紀伊国の司を置かれしもむべなるかな 山中にいと古き寺あり役行者の開基にして昔より修験の人のこもる所なり 此嶺の頂より見わたせば和泉の海はさらなり遠く難波の浦まで見えて眺望いはんかたなし 世の人此山に入らんとする者はかならず身を清め心をつゝしむべしとなん 峯入の行者むかしより絶えず 家をはなれ世をのがれたる人のすみかとなして行ひすましたるも多かりしとぞ

続古今

秋の夜はさえゆく月も松風もあはれはおなし木の山　西園寺入道前太政大臣

その木本村なり入海して海浜の傍にありて今はなくなれり其下は浦にて繁田し民戸も建つゞきて漁猟の村里となれるなり

堺の浦

土御門院
紀の海のさかひの浦の沖つ洲にかゝるの日くれしつく海士人　律師頼高

新千載
行春のさかひの浦の桜かにあかねてかへる舟やひくらん　知家

○松永貞徳の集に紀伊国の和泉の境にあるとて堺の浦とよめるはこのあたりをいふなり みな此所の名をつけたるなり

塩竈地蔵尊

田村八幡宮の社僧真言宗の寺に安置せる立像にして長さ三尺ばかり 弘法大師の自作なりと云伝ふ 金剛頂寺に安置する弘法大師自作の尊像にして千躰の其一なりとて堺の浦の塩竈にまつれる由縁を記したる○或曰塩竈地蔵と称するは昔此浦の海士の家に塩を焼く釜ありて其上に安置したるよりの名なりとぞ

[illegible]

其後その像は法隆寺の宝殿の中へ移りたまひしとぞ
拾遺集よこの歌はあまのまくらとなるあまのおもあるべし　忠見

大歳神社

貴志荘梅原村にあり　本國神名帳に従五位下大歳神社とあり

○大歳神は素盞嗚尊の子なりと伝へ祭る所多し

村の産神として例年毎年六月二日

大年神とも登志とも云ふ稲荷の神なりと田寄の切まりの歌によりてしるべし

祝詞に皇神等能依左志奉年興津御年平えく東穂能伊加志穂尓皇神等能依左志奉者云々とあり

伊勢の大歳神社といふ社の神霊いく田成して天皇に寄奉賜ふとあり

[illegible]

[illegible]

[illegible]

住吉神社 小嶋村にあり 一村の産神にして例祭毎歳九月晦日

八幡宮 西ノ庄村にあり 一村の氏神にして例祭毎年九月十五日

稲荷大明神 狐嶋村にあり 祭る神二座 倉稲魂命○本社は神名帳に従四位上勝手神とあるは是なり

松江

祭毎歳九月十六日

東松江中松江西松江あり紀の川の湊にして西の方村の端まで松原なりといふ旧名これを和田浦といへり和田浦ともいへり○昔は紀の川の水此地に入て見えたりしが水門落ちて流れ変りて其一枝流れにして上は吉川をうつれて水の湊なる所にて西寺の浦の浜より海に入しと其よりのちに大河と成り来たることぞと見ゆるとぞいへり故に川より流れ小の下に入て諸木もありて湊の前に匯て海に入れは其湊のところは此より匯て海に入るところを江といひしなるべし又江より東なれは東の方の樹林あるによりて松江といへるなるべし

是此地の風色たるや北は勝境たる青山白景を含ぐ金剛の色を醸し南は渺々たる蒼海月の光を浮べて瑠璃の光を湛たり松江老松の常盤なる冬の白沙には霜白濱君が鮮明なる夏の雲ともうつろふ千維の都城の雲外に聳へ二子の島渚波浪に浮むさまく水天の一郷まる浜を

望に阿古の二図に一所の翠黛たち苑藻ある舟常に維げて子陵が釣もいとめずしさまで月に感あり雪に興あり波にいろくれむるの美に碑ともとめ濱にとりておもう貝のなさきねまで風流借たの心をうかゞひ四時にかくまれ社絶あるべし

○名産浅利貝 あさらハ似べく殻うすしとへて此浦に産する その殻をあつさしるに貝原氏のいへる蛤遊する

○鱸 いろく美味なる海にて中華の松江に此魚あり名産とす我邦に也雲州松江の丹後同名ありまさに此魚佳く秘色ある絶又天地なるの一奇なり

○松露○烏貝 かきを正と異なる殻の色黄かりて関のうちむおしいとて美味なり

壬生百首

紀の海や春のころふき立へてけさ妙とに沖津白波　権大納言藤原為尹

松江八景　祇南海

鳴渧山寺鐘。客過石竃邊。雲暗村々樹。帆ハ穏浦々船。采田侵雨摘。石枕聴濤眠。鳥喜枯槹子。不労灌諸田。

和田十軒

東松江の東のうち白砂の浜に入て此処に民戸千軒ありて和歌の浦の家毎に白れ綱を畜しふ江戸の浦に其れいらぬ数多くありけるに一日海風浪を起し民戸ことく泯没して一軒ともとめ流れの舟の一隻のみ其船の巳を得て後はかれらの世なりし舟いこもちく彼其の人其跡に十家くれに畜ひ

そのちむかいは此地大なる名居りし今此所を望で和田とうへとや云ふなりて昔の人とうくいふとうん又日前宮の生贄に供の和田横木の社堂これ踏居せしより其名とぞ○按に和田ハ海の名にして古来より大に伊津り此渡より海と和田とへ分つ故に共の入海の出まる名なり今西松江に南海の社ありけ北には名高き浦湾内の内に和田の名なるべしやも又湾内あれはおなんとさんどもてにへ和田の田とれぞりて入江の辺にて曲るなり

慶善光寺

旧村小寺所にありむかしは由緒ある梵字あるりしと其興廃律にたけ礎石ののこりてありて田畑のあざこれ光寺と呼人ハ今其の跡堂に云ふ

揚柳山観通寺

あずまのなかにありこれむかして此寺あるりしへまいりへべし　旧村にあり浄土宗西山流極楽寺に属す　本尊聖観音　長三尺八寸恵心僧都の作○当寺ハ

ちへりと本宗門にて揚柳も本なりし寺院なりしに中古

慶頼後院宗尼と云

春日大明神

中松江村にあり　当三村の産神は在神南都より移し松江三ケ村の産神は

て作る毎年十二月朔日

○社伝に云此所に社ハ元来木瓜正月南都より此れ春日大明神と奉て供祭りて古代の人の社になれり周辺をさくく仏へのうしこの禰と名にあまり祭の分られそくて今坐内に本師釈迦牟尼如来大和より三年五年正月十七日弥せうとくく今坐内に本師釈迦牟尼如来大和の事三条王の陵墓のあと此池中に門思暗堂を建つる近世しか王あり按に陵墓の遺跡ありて殿内に仏を安置す此池中に門堂を建てて近世陵墓の遺跡あり殿内に安置の後醍醐天皇の勅許にて今に跡あり其の今

とへりへ居所をうつさせへ造り後継に天皇の勅許ありてその今にいそが宮の後にふ地よりへ別墓あり

摂雲山極楽寺

旧村にあり浄土宗西山流梅台の旧地寺に属す

本尊阿弥陀如来 立像三尺八寸恵心僧都の作

嶋人の
あるや
宇くまむ
巻家
しろ
嘯山
松書る
いろはや
蔵ハ
浪の
花
支考

若宮八幡寺
春日神社
田中社
極楽寺
秋月楼跡
寂光院
南海神社

○當寺由良興國寺法燈國師の遺跡法窟なるの所基にして日蓮宗の法刹なりしが後世持ちるの所に明秀上人出住し今の本門法華宗にあらず一國の緇素帰伏のん渉ゝ[illegible]ゝ[illegible]学長二年法嗣の徒播磨明石郡魚角荘西方寺教淳上人出て仏法中興し法流の開祖なり

寂光院　日村の西海岸天台律宗　本尊阿弥陀如来　当院古ゝ南叡山大日寺の別院なりしが寛延二年九月勢州津城主藤堂虎の家士何某なる人我住の後離染して玄門なるとなる故来て中興の祖なり

松江禅菴探題賦得僧家月　祇南海

銀蟾澄寶地玉露浸金田彩射毫光直輪篭禅影圓

更深桂子落境寂水魚懸誠向秋懷曉虚空仍處天

観月楼遺跡　日村海岸の長[illegible]ゝ中古廃ゝ

南海神社　日村西北にあり　祭る所は高龗命　桂大佐正道祢宜は社家帳より従四位上海神

例祭毎歳十月十六日　当国総社の祭礼に属す

萬福寺　日村にあり浄土宗　西北寺に属す

当寺ゝ[illegible]ゝ真言宗なりしと云中古荒廃の後仏記を失ひたれば草創の年歴詳ならざれど堂宇古雅一株あり枝葉四方へ俯伏て[illegible]ゝ年のごとくにして千載仏歴ゝ[illegible]ゝ名れるなるべし

八幡宮　本脱村一座相殿なり　一村の産神にして例祭毎年八月十五日

名物糸切餅　日村から多尚通る茶店より[illegible]

礒浦　石浦今は小松原にて[illegible]

万葉

汐神手纏持在玉故石浦廻潜爲明

日

磯之浦爾来依白浪文反過不勝者雖爾絶多倍

二月於武庫之津中臣清麿朝臣の宅宴歌

十首中

日

海人の浦よりはるかに手をかざしてとはるるかぬ暮まくを

徳長

たかくと海の浦波　さくれくことわるる雲のはるかなり

冥白尤大臣

万葉

あまをとめ白い神祥姫風のうわくるあ海人の浦浪

反歌伝長朝臣

支本

たかくとうる海のうつくれ宴せしいそれをあとめく紫成

花傳正公朝

日

海のうつれ浪のちものあのうつ海とのがれふうわく美人

為頼門院

日

いそのの浦よりはるかに小ふたるものあるもの今人ふたうち

後二位行家

教本

知りもとのこころわしいるとや海人の浦よりふたの浦波

後鳥羽院

一夜孫〜海のうつくれの舟出もさすらの海きのうらある空

俊成

家根

わるひまも波と枕に引きてしの浦人さくしの美色

正徹

自分女房名

知りもとわるよ服雪人　春ふる郎

宗祇法師

柿本人麿

世名

江南一夜競
紛華。滄海秋
高雲不遮。羅
綺能留明月
色。清光偏在
莫愁家。

縣周南

蒼茫海天迥。
窮目浩烟波。
朝宗江漢水。
不作一滴多。

萍亭

春日大明神　日村にあり此ところの生土神

光福寺　日村にあり浄土宗　起立詳なしに

日村光福寺の境内にあり[illegible]

十輪寺　○阿弥井　日村にあり[illegible]

古屋の泊　日村より[illegible]

春日の社[illegible]

風雅集

洞のとろやの杉の枝びとうる月を袖にてまる　信正遍昭

山家集

神奈川村にあり不未詳

西行法師

陽杖の井

陽杖の井の井の[illegible]

○本覚地蔵菩薩　役行者の作

○本覚菩薩　役行者の作

入橋

轉法輪山仏陀寺

○金剛童子社　○花咲の井　所謂七つ井の一つ

金剛童子社　○花咲の井

夫面白い神変大菩薩

人皇二十代醍醐天皇の勅願にて七堂伽藍を御創建まつりくけるに尊い霊場なり往古の大門の構へ堂塔の壮厳錦樓井楊建ち僧坊甍をならべ繁く繁り[illegible]

むかしの天皇の兵火より焼失し御代々の御願所にて毎年三月中三百俵の給料の行者法五ヶ所集り来りて友ヶ島をとり[illegible]め堂境にあり[illegible]

なく修法し宝祚延長天下安全の護摩修法行ひ給ふ

[illegible]

の物[illegible]の[illegible]院より[illegible]

[illegible]

所以なり○什寶神変大菩薩御出製[illegible]

○友ヶ嶋深蛇[illegible]王の[illegible]

[illegible]

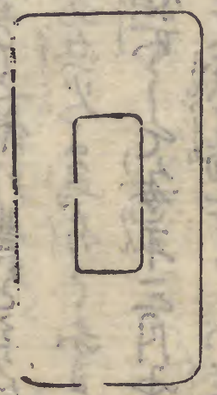
○行者[illegible]母公形

見の御鏡 小圓光の○日外影の硯 日上

篠丸の文

古鏡如明月
幾人照到今
不見古人面
唯見古人心

玉山秋儀



外龍の硯

形見御鏡

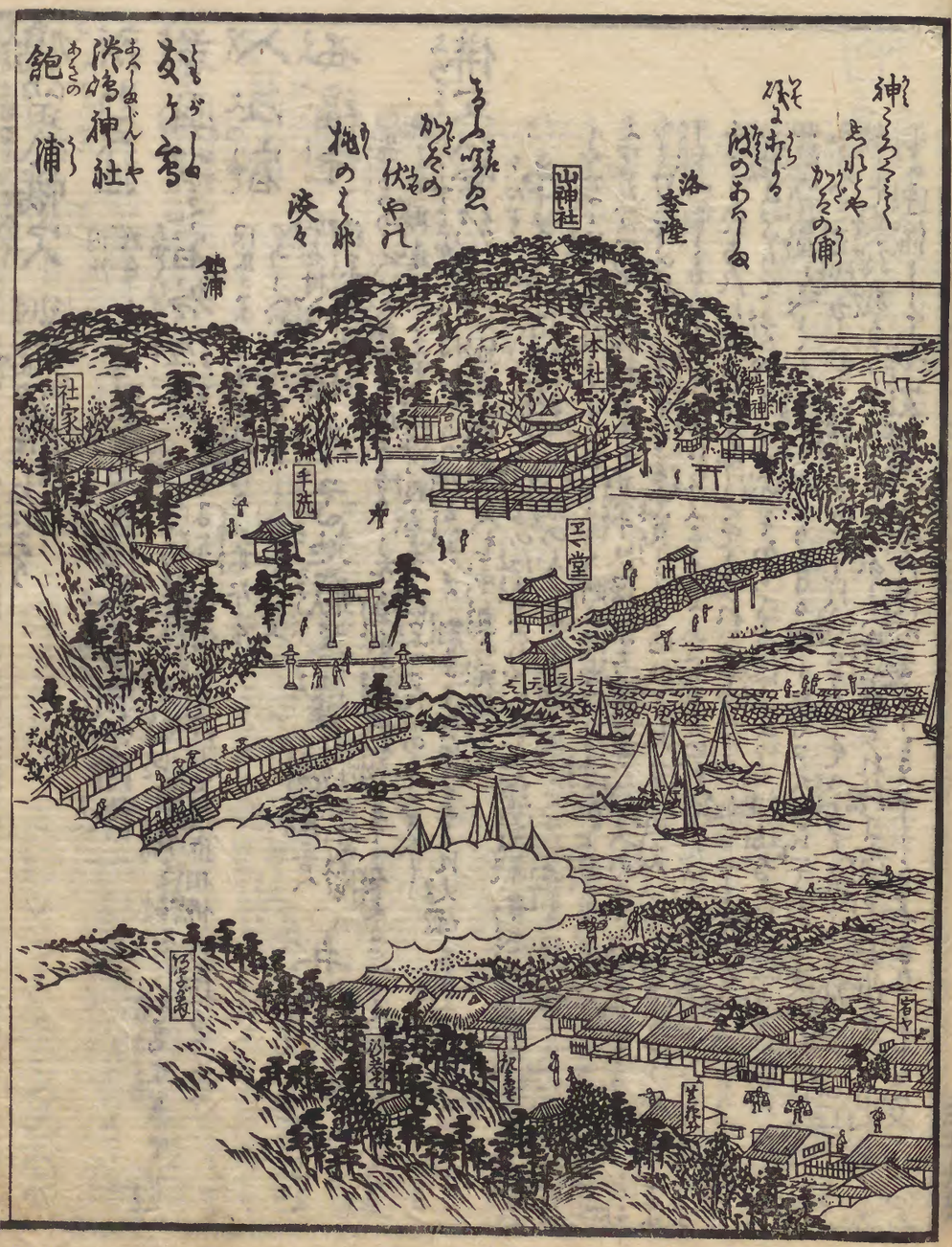
尊圀山
鳩留八幡
女射矢社
迎の坊
参日神社
称念寺
阿弥陀ヶ
之原寺
見沙門寺

其二

械立誰とる
待や門の雪
圀水

一對の琴を
より来る
浦の波
横几

其三



鳩留八幡宮　同所西の坂にあり　境内の別所なり

辨財天社　同所山の上にあり　尊像は役小角の御作

尊円山之宿谷經塚　むかし修行者こゝに經巻をうづむ　同所より十八丁ばかり東山の中にあり　其辺に七大尊子第一經塚とす。これより經巻を寄進して須弥相佛の道あり。そのかみ別所東山峯中七大

入江宿　同所より北の方にあり　文殊の別所にて

西福寺　同村にあり　禅宗黄檗流　本尊地藏菩薩　立像長三尺　弘法大師の作

○當寺はむかし天台宗の霞ちありしを慶長の比堺の民何某といふ者再建せしとぞ。すなはちこゝに寺号をあらためて真言宗に属し、其後の事はしらずといへり。

○弁財天社　境内にあり

佛立山常行寺　同村にあり　浄土宗　創草は弁ひらかれし文禄年中

○本尊阿弥陀佛　袖翁東山上人の作と中興の開祖となれ。ほとけの作なりとぞ。文禄元年豊太閤朝鮮の役ありし時、兵船のふなぢ此浦に出て當所の住人よく彼地にいたりしが、沖にて大風にあひ、船を守りてありけれども、その後船のつゝがなく、其中に佛像を持てる者ありて田家へ持かへりし。つねに此佛を信じけるが、今にいたりてもその利益をうる事あさからず。此の人民あらそひて信をおこしけるとなん。ふるまひにはそのかみ、子孫の御恩をとりて、陀仏の霊像あらはれ玉ふときは、ちくさる其処にふ。四隣の民屋なべて人々をあつめ、念仏ありけるほどに、二たび其の仏像を迎へ奉りしが、まうでさわがしくなりけるゆゑ、安置して泰然たり。一宇を建立して今の寺とす。其家の後ちに、本尊の霊験いちじるく、住僧安置しまゐらせ、連綿として今は住持の守るところとなり、其家より代々

迎之坊　そのかみ大きなる堀をかまへたり。加太村の入口にあり。同所阿弥陀寺の別當なり。○縁起曰、かた浦のほとりに住ける人ありけるが、孝徳天皇白雉四年の比、かの夜半にはかに海濱に光りを見たり。これ人里とほく来りて、海中に沈みける佛像を拾ひ上げて安置しけるとぞ。其後寺をたてゝ迎之坊と号す。あまたの仏法僧ありて、本願寺の末流となる。阿弥陀佛の霊像を安置す。法輪寺と号す。当寺の本尊は恵心僧都の作にして、文殊菩薩の霊場とも成るべし。天王寺のこの所にて、まことに利益ある霊地なり。いにしへ大伽藍ありて、諸宗兼学の道場なりしが、中古兵火にかゝりて焼失し、今は僅に一宇を存す。つたへいふ、阿弥陀寺と号すること、其本尊の尊容によりてなり。今の世にいたりても、其の霊験あらたなり。當所の漁人ども、海上のあらき時に祈願すれば、必ず風波しづまるとぞ。

形見浦

此地の豊饒なるや、摂泉の津々浦々より江都へ運漕する海路の咽喉にして、諸国船の上下必ずこゝに泊りて風をまつところなり。

海士郡淡嶋の北にあり。同所より磯辺を過ぐれば、是より五十丁東の山の麓よりこの所の浜に至るまで、海中に岩多く、潮干には満潮と名づく。○續日本紀曰、文武天皇大宝三年春正月戊寅始置紀伊國賀陀驛家○延喜式云紀伊国駅馬賀陀八疋云云又云凡諸国駅路邊植菓樹令往来人得休息云云

市店軒をならべ素封の家は居をかざり廃居の利を争ふ酒をうり肉を屠るの家は旅客の饑渇を生ぜしむ其外繁昌なること大坂ならびに堺の湊口にもおとらず此ところより沖の方二三里に二ツの嶋あり北なるは粟嶋の池下に出で南なるは沖乃嶋也此所を地嶋といふ又沖の嶋の瀬戸を西の湊（または由良の湊ともいふ淡州の由良と対す）地のしまと沖の嶋の間を中湊（淡州堺のはざまなり）

紀州に隣れバかくいへり一説に紀伊和泉都湊の名所とよめる地なりといへり

といふまた小島の地嶋より近江と牛が首の瀬戸といふ又風光佳勝なるところは先哲の詠歌にをらねたり○名産○鮑○裙帯菜

（泉州淡輪より兵庫へわたる海路の地嶋と云へる所にてつくる 淡路島といへる所にてつくる 春よりの間とるをとの海べより西の浦を裙帯菜とい）

（此浦の海底二面に生ず毎年三月中浦人かつぎてこれを製す好事の者中にもとりて上品とす江戸大坂の献上とす其外の者はこれを製して下品とすも献上とせざるわかいわゆる浦にわたらく産多き家も〻）

海鰮ひしこにて製したる味よし

玉葉

その名のみ形見の浦の友千鳥跡をとゞめぬ時のまもなし　前関白太政大臣

続千載

あはれとも誰か形見の浦伝ひ波にまかせて行人のなき　正三位経朝

新後拾遺

友千鳥なにとかたみの浦伝ひ跡は波にまかせてゆくらん　前大納言為貞

同

袖ぬれし人やありしと藻塩草かきあつめてぞかたみなりける　信実朝臣

夫木

うき人の残るかたみの浦ちどりなく〳〵跡をたえてなよし　民部卿為家

同

あはれなるきさみの浦のうつせ貝むなしき恋のなれぬ年のを　後鳥羽院御製

拾遺愚草

忘れやはする秋の形見の浦づたひうきて沖の月影　定家

現存六帖

あはれそのかたみの浦のうつせ貝むなしき浦のかひもなきかな　源兼泰

万葉

塩氣立荒磯丹者雖在往水之過去妹之方見等曽来　柿本人麿

ゆくや春とまるかたみのかへし貝　梶亭老人

形見山　かたみのやま　山もあり

藻塩草　安木にありといへり麻生形見の山はあらしといへり

春日神社　小石にあり是則加太浦民家の地の古謂なり

当境の産神にして古へは是より東の方山半腹におはしけるを天正年中桑山修理亮重晴若山より当城のおはせし此地の丁宿にうつして勧請に例す毎年四月廿日

新田紙店
八千坊

加田和布
制
汐燥戯言籃輿力
菊々和布我以栄
休談異域居高臺
満眼居兒子湊盛
一浦
出要
一柳

頭巾石○笈掛石　海中にあり

土俗此日の飲延に戸々海老をかざることは旧例なりこれによつてつり下りは海老居りのなあり
その由ゑんゑこしられたりわれ鯛魚のたぐひなるべし

道祖神　同所にあり　祭る神岐神

延喜式伊弉那岐命黄泉平坂にして伊弉那美命に建絶妻之誓の後なりしなきの所なりしよく神代紀に人皆是を知る日本紀に日是ハ莫過所投其杖是謂岐神云々
フナドノカミハクナトノカミともいふてその杖をなげ給ふとある所なれバ黄泉の穢を除き人根ぞ悪魔備ふらん禍神となしてあがめ祭るといへり
同日本紀に首投の千人所引之石塞其坂路伊弉冉尊相向而立遂建絶妻之誓
又曰塞坐黄泉門之大神と云亦名道返大神矣といふ塞神なりし幸とも又従者あり

八王子橋　同所にあり

古城迹　八王子橋の西出島山の上にあり　新暦譜に云だてこの出島の城山と云

新田　小田の南の野小田より川より巣鴨の往還へ出る新田といふ

此地最繁花にして民戸千餘家にあまり都てこの船商ふ事東は総房西は九州のはてまでもつてこざる所なく生涯此外にありて数十年を或ハ過ぎゆくもあなれバ此家々はさかへて遠近をさかねとありふ舟をのせてなかる波またくらおかの一夜をあかしふく世のうさを消すなるなうべし

新田旅宿

このまゐりの泊るところ此旅店にやどれる客ハ旅宿ハ大勢の人々の寄りておもひ出るこの事の外にまくる人もひとつの所にしるかれは此地をめでてよき宿とす此山にもつて陰した旅人の夕暮にしらせて此旅の内にたのしみ居る宿の飯をもしてや人のかけしもたくなれは甚おもしろきことなれど此しけつぐに異なりまだは直ル様も又つねなりとかぎりなくことかちと流れのわかれのはての一夜のあそびうるおしくして四時もたえたる出来る事こなり

冬も国乃拙ふなりとぞ侘しられゆさて濱邊ふつゞある逆旅主人のあるじ御迎へ行を送る小女郎の声かしがましくつげれば浦よ臨みたる家造ふして居なづらの眺望ハ妹が嶋より武庫まで [illegible] 阿波の二田山ぞ見して眸を転ずれバ摂播の海山 [illegible] とるがごとく絶景まされたり 磯ふ出てハ和布刈するあり [illegible] 帰るを [illegible] 恰都の繁昌邑ふひとし

江南竹枝歌　祇南海

郎去歸期在月前。探得神籤熬釜鈿。斜陽淡嶋布帆影。不是房舩定薩舩。木洲浦口十餘家。皆是舶商。半生在房薩備豊之地。有數十年一還者

山櫻花開海苔肥。雨々三々踏青時。汐岸潮來相携去。不拜崖頭去婦祠。地多海苔。每歳三月三日潮落。郡下士女來採珠貝。日暮潮來而罷。○浦口有少彦祠。土俗相傳住吉太婦祠

[illegible]
花とかし [illegible] 人と春乃うみ　宗祇

加太淡嶋大明神　かだ浦の西南にあり古しへハ名草郡と云今ハ海部郡に属ス

祀る神四座○正殿　少彦名神　相殿左方　月讀命　大巳貴命　右方　氣足姫命

○延喜式神名帳曰紀伊國名草郡加太神社○扶桑略記曰延喜六年二月七日授紀伊國粟嶋神従五位上○本國神名帳曰海部郡坐神従四位上粟嶋大明神

四時祭礼　三月三日○四月八日　九月九日○十一月十一日○祝詞舎○拝殿○神輿舎○神楽所○文庫○御供所廳舎○雑棲門○御厩

社頭海に濱して常に風 [illegible]

[illegible] 國祖君 [illegible]

○御鐵燎　○潮石　○石五倍子挽石　皇后 [illegible]

○摂社中言神　これによりて [illegible]

[illegible]

往傳よりて尚社少彦名神とともに神皇靈ゐるのほまれしく
天皇激ゆふまゝ由とゝろこゝ大海乃容水
さゝ小ゐるたゞぎくにたてまつりける宮ふ大己貴命と力を戮セ
心を一にして傳ふは葦原乃中津洲に造り固めあしゐるに
國くを造りて豈と隆平げ豈ゝに立敷を樹さゝ先
草木に嘗て其性毒とさゝ療病乃方を作ゝて更れる
數民貴の宜に精んぐあれ禁厭の法を作ゝるゐ遂ふは
人上古未紀方後村遠神社
啓蒙家和の方と大同小異のあり
ほゝ知るよりて跡なぞめなましに
ゐる神代の事に絶へく人皇十五代とゝに神功皇后自親こ韓
を征ゝ凱旋まゝくけるふ無道王の謀反によりて皇太子を
武内宿禰に託ゝ本乃水門より走く日高の地ようたう至セ
たまうんゝく官給盈ゆよ雖ども向ふとゝも虎嚴頻ゝに風
とゝきゝ陽候敕く浪を揚げ漂蕩して忽に失ひ

進むゝに得ざゝるゝ皇后歎ゝ艫ゝに伏ゐ給ふ天科
地祇と作ぎくけるのたゝん方を導セ給ひ中ゝに谷に
ゝくは中に投ゝあひ其流ゝ遠く進まゝめまつる
ゝ安ゝと漕ぎ遠ふゝ乃ゝ波わゝ
皇后別名ふ上ゝ
あゝ其必ず乃危難免ゝ
ゝ別山彦名命ゝ
冥助あゝゝに涼く感ゝセまひ
業乃祖神にまゝ由ゝ皇后為ゝ妊娠の時此神醫
らゐなまひゝゝ痛ゆ
赤白乃帯下ゝ悩ませ
ゝて祝幣帛とゝく其ゝ
響乃あゝに絶ゝ

ゝ方ゝ初祝に憑て神詑あゝゝ

則其こゝ〳〵に住し給ふを聞てつゝしみて不豫立給ふ
平癒ありしかとこれ皇后神恢森大きさちかたやうて
韓国よりはるかに〳〵皇后の御子応神天皇の御宮奉納まして遂ふ
りでゝ〳〵皇太子に日嗣の御代を後日〳〵に神威を作さて崇
流恙ゝ巻ゝの御代を後日〳〵に神威を作さて崇
致あるをもひけり其のち十七代の帝仁徳天皇洛西難波に於
猶ちゝたまひしに神宮あつく新たに宮殿ゝ〳〵立て
三月三日の月日〳〵名づけより新殿に遷ゝ奉り皇后の神
霊とりて合祭ら御神とし祭りて一区四座〳〵本の地と今の地とを
て加茂葉治大明神と称へ奉りて其餘二柱の
摂津国西宮郷に至る世俗にいふ蛭子の神
め蒼生病苦ゝ〳〵ふる獣畏り安ん撫い

まして好ふ夫婦妹脊の守り子たる女に悪とゝ
平産に護ゝ給ふ衆人の渇仰厳に歴代侯伯の崇敬なる事なく感ず
ゝ〳〵に〳〵神祠について

○その世に例年三月三日九月九日女子雛ゝの戯あるまゝ
生古神功皇后てゝ小彦名命の御神像と作りて出社の事
納ゝ給ふ給ひ其後仁徳天皇の御宮祠
にして天下婦女幼児の病苦に撫除のあり礼に玩物として雛
ゝと製して奉ると祈ゝ願ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵
彦名命の御神像にして奉ること雛祭の
に〳〵〳〵ゝ秘ふる

おまろのとゝあ〳〵神典のことゝ人よ〳〵ゝ〳〵の

以上社家の秘伝なり

世系歴代の次第は、[illegible]

○神賓八坂瓊曲玉○神功皇后御鏡○日御左刀○綏之差し物

○神樂太鼓

○大洛宮御境○日御左刀○真鯨拔峯に帽あり

羽飯ひらふ瓜あり[illegible]濱ち[illegible]

亀翁

一對の琴琴[illegible]

[illegible]

能備堂

昆沙門天　役行者の作　○日不動明王　弘法大師の作　○

友ゞ鳥

友ゞ鳥の勝景なるやなり

拾ゝりの一人もあることあり

遂ふ徒演道の約束となる

の配下家に来く[illegible]約束

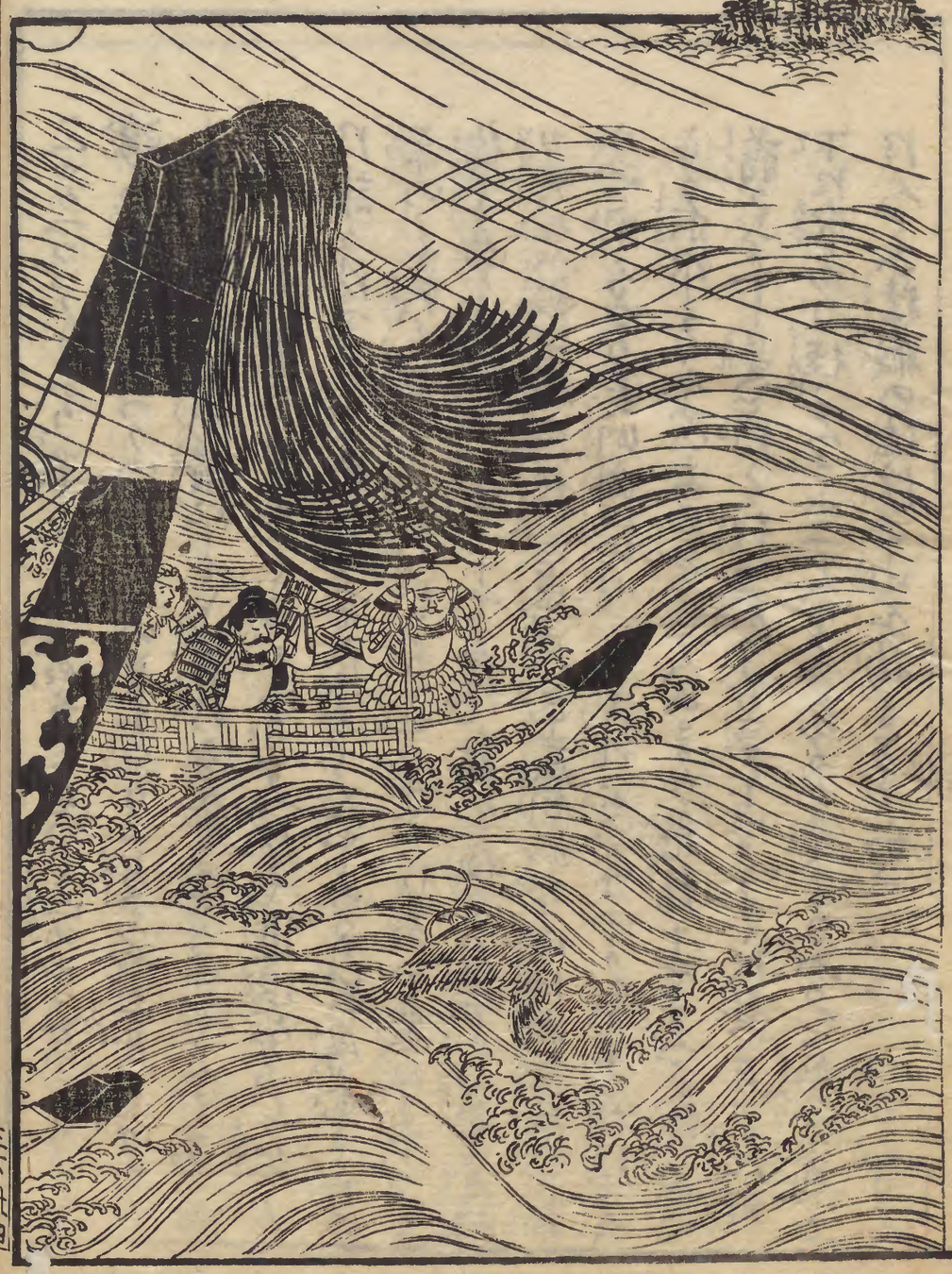
知ゝこいあり地寫沖寫

いろの翼を[illegible]

ごとく走り神彷徨其肩のうへに黒子と添ふごとくんごとく西南
の方に浮出づる先加茂なく舟を下し歩の牛を首ふいてゐて
上る赤の共長地彷徨る陸ふちにたすてさい呼べるちるごと
彷徨の周囲ぐるく二里にも足らぬあんまり松の翁蔚として名を他の
雑樹もまばらに混じて榛くまと名月丘の麓にとろ〳〵時く涼く氣に
彷徨つく〳〵亂亂たる蒼〳〵まる天外に聳聳けり赤松碍赤砂崖
鼓匡金鑄眠巖まの諸物あるとこもも未奇絶〳〵もいと殺
畫くのち沖をふ向へ其間相距ること元狭〳〵朝物見るたあ
に像ものを鼓怒〳〵〳〵以て濤をあ〳〵混灝として渦まけば
潰濩たる真珠恰も百千の迅雷を怒ることごとくる揮師
ものごとくその尾間ふ比をもまと宜ちたるや舟既み彼岸ふ
らん〳〵て是ものをむに教てる牆のごと彼の間ふたくるりの氏
廟ぐ原ぐんと一所の大石にして長さ三十伽もあるんん蒼ふ
ごとく

こつつづくあり羊ゝ下に石ることとく山の字なりとこと
踏ふ皆乃ごとワつふかくしの足を容る一足ゝあべ一歩のをくめく
しりて彷徨ふ滑にしく彷徨ちんどよりすぐるごと足の
蹈べく手乃攀べたもたく唯とごうすぐく進退かく公と
乃誰う後へまるくの多くんくんやあるしい屠ふよる
羊のごと戦く要〳〵戦彷徨ふ求い毋とりあ明安四人のごと
徐〳〵屈〳〵蛇彷〳〵辛〳〵して其絶顛を極るふ位見石面ふ友彷
五所樹ふ教生獄悪初念崖序品崖剛仏井深地地級地ふの数
字と明るもう是四囲初の時　南龍公の命ふ入て去梅渓ふ去
もるふ仁〳〵字の大さ名ふ人あまり恐動してすぐく雲風の
翁ぐ〳〵是とけく松の苦辛をつとるくに是まう九畔
下に宮あう徑ふ二尺ばうあるぐ是くうつるとく観念庭と
に人〳〵ふ猿猴の涼渓ふ水を掬まるごとかくとたまくあること

神功皇后
三韓を
ぜめしとき乾珠を
ませし時かの沖にて
風よおひなまし
しばらく艦
天神地祇
中に投じ
ひとつの
のしるを



二丈いろう碑あつて立つ道覚親王の筆しるす其風勁古ふ
して雅致あり西小の方にも又猛くる牧牧の乳ごとくなるり
い是は窟のにうり上者大ようなることなる天ふも豈ゑ下瞰
潭澄わたりて玉泉にいとゞ試に杖とたて大海をまぢ
ふふり嶮さて人く坤軸にくだくだくゞ崖を生ずい崖ふた人
て道とうもう磨さつ足にてもちて外の方よ依ようこれ低
約ふ足ずい地とふ平い山崖よ垂まさうの刈禁寂とやんう
射蓋にたとうしもさつふふ人ふ人ふ崖の北
畔に沿るたぐふりの約其乃徒の所謂剣と称ちるのこ
南ふること二百歩斗と巨石林とうて海中に立つふとめ
ぐして岸ふ上り蔓者とそつく小ること十歩歳うそそ
大ある穴ちもう其さ又荒神乃あふふあふふ好刻
ふ人ぐこし古れ仏序品の窟に約若乃徒の称しく

胸内くぐとふ人ふりの十つとあり其磨さ乃ぐふ人仏容るちき
まと肩乃程ふうあり水と敷てうつく約ふさふに恢くして
餘地ありちぐやうち人ふ唯正黒にてあるあり
探索りて約ふ姑て物あるぐごとゆるふ別窟に其ふたり
る水乃碑ありまと石ありそふさふ山くつく崖んふ
蔭にまされふ例まんふして絶ふ崖に嶮まて岡ふものあり
うちふふ人ちして慌をやまうしるのあり窟のうち斗ふ
百約あまれり西南の小山仏滝ふと百二三十歩にして湯越
とふふふる山地ふの中に松ふ最界しるも満潮ふいさて
にもさし朱くふてふ山仏越さしむべけ三ふ山ふ名つる
あり一小山のり宗くふして臺陀の岩に似ふりされふ岩
東小乃りされと痕の松ふくに刷もりてふぐごとしなるま
また磨くふて子にるぐごとゆるりの拘漫乃ふ南ふ

下まハ閼伽井の碑あり井ハ涜ま濱へゆく所も存ぜざりしまゝを
より神釜ふてる其程二三尺ふちうし岳ハ浪の西辺ふそうて
行あり其ハ御龍石消去して亀の甲ふたうぶごと漂母の晴
をうかめごとおもへ稲荷の素兎ふく然野の大然ふ居そ
弟ぶんぶ名つけそにふるとぞ名桜の繁さしふなし神ふ其
周圓三百歩にさし西南のうち今尉として良まあすりつて細池
まり是別にて強盗の徒ほとへりて小角神劔をゆるの所にして
神ふの名のよるふなりて是をそつてまうひさゞる所ち今粟
ふまふ住りまん也彦名命ハ天津神代のむかし淡来まぜし
地なるとまてかくハ名を負つるにて

日本書紀に少彦名命行至熊野之御碕遂適於常世郷矣亦曰至淡嶋而緣粟莖者則彈渡而至常世郷云々本居宣長が古事記伝に湘たる言紀の此章を
こゝに出たるハ伯耆國風土記に相見郡家西北有餘戸里有粟嶋少彦名命
植る伯耆國にも接る當國風土記にも見えてしけ其ハ引紀をとべきをちうしと
えるも今淡路の地は粟嶋と唱へするしてれまさにおゝなるにはおゝにくるんくまゝ堂
御碕とゝろるい別そ常世國御碕とゝろこれなら彼とゝろ此説のみおしへ下より此説をうゑと
致さまつまうることりしようきりうれこまりつゝ考ふるよ御神をさうまぜし粟嶋

紀らへ名に此地ぞろゝんしたまく日名のめのかのりつくつらんと日ハ淡路國分彼の志す
來ことそありますて安房阿波ゐのふとも八くべけ其云ふぞりとてけんや其上宣長も古
事記よれつく生ぜしまし此其名も來も相うてる地のあまくとなれい神代十之卷
の此海神の羅摩船よのりきうつしん彼に三種石室のこともく弦と聲くとくつゝく
すしたこの粟嶋のりしんも由あるすきて候とぞ

一常の出所滿ちると布浦といふ其間なるて候壺ある
是當國海路の不息にちまるかまへろあり南に行あり
八九丁地に潭あり雑木枝桠として深みふてん所渭蛇穴あ
りのを称らんとまども至り安からだへるなにも大蛇
なんどの栖とせる所なるべし國ふ成るて東小のうさ浦中
にさし出するを海椛推としてて海椛常にまてまよるといふ是
をそあうちなきらの南界なりまハ阿波の多らふむゝへ西ハ
淡路の由良ふ接して其ハおうめのちうくしくてまさとせず
てんなりして裳をうけくハてゝまくありうしむ東のかさ
百歩ばかり道風樒として山のとうさをみるふ海によまでまた

入るまゝに海辺をへて巖根のとがりたる兵庫くゝりて水の面に接せるりの山樹のこゝとに戦のごと白のごと計の陰をたゝすぐ
ごとくせん冠して立てくるうごとありて悉く名はたることかと
しれ友侍の寺と称ちるの観これはたるのちゝ
さまいむ一道風とつゝる法師のこの地景をふくあれ
ひらくさてこれあらば仮しよう兵名とよびとるんまこと影巣
山ゝつるあり其巣上ようの下ゝ仮下ようの攀へりた
さしもさうした巖にようてひまへるもう嗚呼るの勢ふ
るかゝる険阻ふ宮ふさけゝうゝ安閑ゝてたのしめることと
ふの已ゝ道ふ高尚たし爵禄をもくうんだ光を離を
道ふ通ゝるの徒のたゝぐさに仰ゝるゝようゝ東北する
と二百歩にして女濱あり其のり其石まゝ寺ゝるとども道風陵よ
ゝゝぶれびやあざらふあゝてさしたゝるどこに勢ひゝす長

女の名のうゝもる示以五十崖に石上松と生ゝて夏に色とい
ふ大なる石の形ふ風ふさしたまくあやゝすゝたるゝ海の中に屋
風ふ立てるゝごとひゝとたゝたゝびゝゝいかの唐土の綿歩陸地
つゝべやそゝゝゝふの方ふ道するん高ふ其ゝんでたゝつゝほて
まゝ寿石ゝ牧ゝ傷あゝゝこと　囲君雑種をゝゝせゝ人
の示ありゝゝゝふして文ふ小ゝゝこと十町あゝゝゝ蒲浦にい
なる陳地池あり往百歩ゝゝゝ出ゝゝ是蛮蛇の幽
宅にして笛の音ふきくゝこをにゝむ美犯ゝゝゝゝゝ
鬼谷と平ゝにゝゝをゝゝゝゝ山ゝゝゝゝ指ゝゝゝの蒲宮ゝ具と指ゝ
ゝゝこふゝゝる護摩場あり往験のゝの付ふ本ゝ法と指
ゝゝの示ゝゝ弾い池のんふゝゝゝ友家の観音ゝゝたゝく
戻谷にゝゝゝゝゝ

海部西邊有友島多怪巖詭石奇卉異艸古傳以為神仙窟
或宅役小角修道所也余少有丘壑癖欲一遊之或以官事
為風雨阻不能果志今茲冬十月有公命探島中奇賞
与二三寮友發舟牛渚直達友島此日也天晴風和氣色如
春一碧萬里波瀾不動如行席上如有物引乃知天吳海
若有所助借愉快甚矣遂得窺其秘窮其蘊島三斷而浮曰
地島曰沖島曰神島謂之地島者以距海岸不遠也周廻可
十里樹唯松茅蔚蒙龍潮氣起下則見一片青翠中天而懸
沖島在其坤位二島相距間甚狹故潮水擊怒雷震百里海
波之險舟人比諸鳴門地島沖島為張翼勢若雙眉然神島
側居西南為眉上一點地島有牛首赤松崎赤砂背鼓匡金
崎眠巖之諸勝然無大異觀其奇絶特在沖島末達彼岸望
之湧出波間如欹牆者為伟原一片石三十仞其廣三之一
半以下累々乎為凹字為積環踏以登則可以容足跟一脚
置而一脚累々乎為緣漸踏且進若疱僂承鯛牛以上無皷如磨成脚
序品窟闕伽井深蛇池劒池等字是國初南龍公命李衡念窟
余蛇行戈得及之石面雕作友島五所禁殺生纖惡毳念窟
無可措手不得扳窮將哭仰視先登者已極絶巔先鳴誇捷
正所書也字大可三尺飛動為鳳翥勢爲一奇觀也少下左
畔有穴徑可二尺懸而下得觀念窟々廣袤可二丈右碑上西北
其中道晃親王所書華力勁古雅致可愛乃磨墨打之一嘯
響有口撥爾為巨獸喙上闕書天下俯無底之淵倚劒
振大壑爽然有揮斥八極之想發外有道由崖而作之廣
而外坦傾就而睨之膽已落矣履之背逡巡足二分壁在外
當比時也雖禦寇射不得不廢余乃股栗伏地汗流至踵步
不能進從前穴出同行者嘲余為盜使余辟以強弩未力崖

之北畔上下為破裂狀者曰觀怒濤噴雨水齧所致也南下
一百五十步許大石簇々林立海中移舟上岸援蔓葛上十
尋巨靈一擘裂者為序品窟其廣才可容人其高摩肩歌仄
以入則恢々乎有餘地其始正黑左右摸索而進神定而見
物側于崖樹碑題曰妙法華經序品第一窟右懸石將墜不
落有倒石嗟乎崖腹熊經而上鶴啄而下稍得出窟後計可
六十尺西南匯山一百二十步得滿越地形島中最庫故
如駝背槖多石少壤不生餘卉唯松樹數株環之可上東北
歷指播撰諸山鮮淡如画僉聚掌上蓋非以其高而所居無
前後汎潮滿則舟可越山所以有滿越之名也一小山突起
阻也南下得閼伽井々陷今不存有碑記耳自閼伽井達于
神島二里而近舟泛島之西邊而行詭石峭立頂塊萬狀起
松下懸崖腹其弇然扳緣而上者若龜曝其奮然欹立而仰
者松下得偃然相顧而傳者若漂母卜晴又如王仙子之
羊李將軍之虎攬幽之頂應接不暇神島周廻三百許步其
西南岑蔚劒池在艮位土人傳言角仙得神劒之所謂之神
島者少彦名神祠故在于此後遷諸粟洲合祀神功皇后云
布浦与神島隔一帶舟過其間有候臺備海防南行一里大
半里得蛇潭壑谷所注湛為潭蛇虺之所蟠狸鼠之所穀惡
木毒卉亂雜塞蹊欲探蛇穴者鄉導想險隘難往乃止過圓
山東北轉倚累出海中者為海獺堆海獺每遊其上是為友
島南界南對阿之牟島西接淡之由良使人搴裳欲涉東折
百許步得道鳳崎山勢趨海波底皆石峭巖峻起錯置若棊坐
子似圈似臼似櫨似劒似戟游者若龍企者若暈若冠而坐
揖而立不可悉名狀友島之奇觀至于此而極矣昔時僧
道鳳者愛其景居之故得名鵲巢山有鵲巢于巖上懸不可

下拯不可上攫險自王避害周防不特摯且貪亦可謂智而
黠者也東北二百歩得女濵海石亦奇然比之道鳳崎則山
稍平夷石亦不峭所以得女濵之名也五斗崖亦多奇石石
上逞々生松冬夏蔚然大石數行屏列海波中季倫四十里
錦歩障亦可想也從是北折取路土山頗平衍無奇石得牧
馬場日中而馬入無異觀乃上舟北行一里大半里得蒲浦
有深蛇池徑百許歩傳為藏龍藪惡聞笛聲故遊友島者不
賓簫管之具若誤觸其怒則薤粉矣有護摩場役氏之徒時
來修法有碑在池心池多蒲艸沮洳汚塗履之則陷鷺歩而
進得幸碑下碑高丈餘乃累荷稍得打之蓋友島之觀盡于
此云余嘗聞之故老之言友島古曰苫島神功后征三韓歸
也麝坂忍熊二王子謀反拒后於住吉后不得入乃率舟師
出南海俄颶風作陽侯波起蛟龍夾船挽折駈裂不知所為
乃祈于天曰我師可濟神其佑之乃取船上蓋苫以投海從
其所流而往止于神島島有少彦名桐后喜以為神之所護
也名其地曰苫島後或為鞆島又為友島蓋以方言相轉也
其曰妹島者亦以神后謂之乎或曰以二島為妹兄也今茲
公思友島之顯于南海也始於神后盛於小角而文其境者
吾記夫友島之奇也俾能画者写眞景又辱命臣衡為之
獨有南龍公而紹其緒以雅馴其事者又唯有今公也
李氏之事先公也以善書鳴于一時衡不才辱以文學近
侍左右日久雖不能敵李氏之才幸浴右文之澤私竊謂不
後敢不謹以記焉哉寛政戊午冬十月二十八日奉命遊于
友島既歸紀遊事以上

紀念右大臣

正二位和家

よみ人しらず

左上文室

藤原忠房

よみ人しらず

耕雲

地の名小名

毛嶽

大家

太谷

鯨口

長谷

鮎の浦

下モ修

中の浦

冨田之

神の湯
神湯
五所神社
東岡
西岡
両助石
長谷
宇佐宮
鎌倉
鎌倉宮
大仏
大仏
長谷

神鳴や
麿ホ
芦の舟
浴尾金
神湯
武田ふじ
弁慶
紫泉
蛇池
清水
清水
アカ井ハ
ニレニアリ

友嶋五所石碑之圖

友嶋五所
禁殺生穢惡
友嶋五所
観念窟
序品窟
閼伽井
深蛇池
剣池
寛文九己酉雕

観念窟石碑
観念窟

閼伽井石碑
閼伽井

深蛇池石碑
深蛇池

剣之池石碑
剣之池

序品窟石碑
熊野山検校品親王道晃御筆
妙法蓮華経序品第一
三奉行 若王子晃海 勝仙院晃玄

沖の岩小名

石ガ石 日ガ石 緑骨 長谷 布ケ浦 仏ケ辻 地ケ谷 ツヽ浦 ケ谷 ケ谷 ケ谷

まて釣ばかり　これを釣るとて人其漁のみをとるとうたふの奥味かり　網の魚を次とす
又本所服浦よりも出す　ものけ五多網
あ〜はしく網をひく　その漁まさかり　れのうをあぐるなり漁
阿ひろ業つも奥あるまぐもあり
万葉　細小鳥海子哉見飽浦清荒磯見来吾　柿本人麿
新拾遺　紀の國入飽浦のたゆ人つまとなれしそこもつ　後人麿
一字抄　日と仮つくあくの浦の志貝つと見て　俊頼
かた村ろ大川村くろ　紀の頂と海山峠とろ

深山

此地西小より海辺の吹ふく山頭の雑樹もぐくえんぐと
たま山勢に生ぐて偃仆い悔もまた紛ときて浪まる蓋
のぐ〜麓より十餘町ばく峠ふつる東南の峯峯
を抽くこれ小海に西小海ふ岸して朗ちる其実生と
して蒼波の上にたちて相拱揖ちるのい浦の千光寺に

其地穿相接せんとして中断〜西小に向つく出るのい私田ゞ神
ん二の谷より摩耶武庫の諸山綿くうて波深とす〜や東
に折くい纏絡るとたぐちる吹飯の浦より茅渟の海眼を抜
じて景ぐ〜翠微より大川の里ふ三面の白砂皚〜〜
雪ふ埋しぐ〜ぐ丘指〜由良の門ふる舟人の櫂ふ
宮ふ星一点の勝景い紙長房ふ縮地の術もうやま〜

山家集
ふたつよ海ふ月をうつり出てうたふ見ぬ　西行

戌日西ぐ吐ふ大出ふくの海ふ
山のはたといふぐいたまの地ふもおりめ
今案集千載集の紙ばたよ和山深樹
ちするおちち蓮ふ蓮ふ
さようあるあり長伯が
〜〜〜〜〇風よ〜人児きの
十ヲ沙よちの宮と五ち最ふ水目の宮
ぞう〜〜〜〜

国立公文書館
National Archives of Japan

園生天神教化之處
平等寺月花
さくらや
山吹
浴八千尼
傳泉

夫當山念佛啓運のそ像い性昔後ち羽上皇院宣あつて大阪淡路
ゆ左近ゆ流ひしゆゑ流ちくて赦免の宣旨ちくしゆ終ゆ承元二
年冬の初津路ゆ向うせゆひし土州ゆ船ゆ乗れたるちゆ波ゆ
つくんとれゆ風ゆ吹ゆ風波あくるくしゆ閏に十月廿日尚浦
ゆ油生濱ゆ船ゆ乗ちゆ乗ゆ不思議や渚の沙ちゆ播磨の之
とゆ侯ちの事相まのあくるゆ長ゆ大阪ゆ地ゆ流ゆ等の
因縁成熟の端ゆ向ゆ枕ゆ地ゆと播磨ゆ流ゆ寄ちゆ
山浦の長ゆ所閑梨孫ゆ生ゆ
長くして嘆ゆ配ゆ
国三宮ゆ浦ゆ
ひくくこゆ
きゆ崇敬ゆ
まひゆ
生の所閑梨ゆ家ゆ生ゆ

山値遇ゆりゆんゆ考ゆるれゆ
あゆまゆ大阪ゆ
ゆ盛ゆ
らゆ
そゆ上ゆ
を刻ゆ
りゆ其背面ゆ
ゆ
あゆ
推ゆ激ゆ
と俱ゆ
彼餘ゆ
ゆ

約昏代名号に於むすひ代大名珠として称名相とすることなるとして終に四月十月下旬けうと船出しまつくれ相く
所人道訓よりすぐひ報恩のあけ地ふ一宇代造立しの
霊像と安〜まうる不断も念の道場とした地後い拜岳
周旋〜〜ふ月々ふまの光代澄〜ちい蒼海鼻濤と
して潮音晨ふ世明の睡と覚て海辺世垢の紅塵まう
○什宝六字名号○桜木大念珠　もれ漏記まうし

大川村

崔ふよりまうけ地ふ面〜ふ瓜巻ふして居民の産業漁ねはにまのこうだ伊勢
尾花ぬまへの面紅葉くいは浦よりう歩ろうて〜頗るおもしろ花まう

○産物　ふ松　海あは　鱸
章魚　鯨　鹿尾菜　桜岩　鮪　海鼠
漁人おく〜名分く〜の豚の瞰と竹月盛て おそうれを高味面に強どれ
水見のとこうこ水見のとこうこ鯨魚ん て 燈と 投ろうとう 岩又一奇ろう

紀行國名所圖會巻之三下終

寛政八年八月官輸上淮
文化八年五月海宇蒙行

若山　高市志友編述
浪速　武内華亭刪輯
平安　西邨中和圖画
京師　渡邊玉壷齋書

一之巻上　浪華　市田治郎兵衛
仝　平安　山崎庄九郎　井上治兵衛
一之巻下　浪花　山崎庄九郎
二之巻　京師　井上治兵衛
三之巻上　仝　同
三之巻下　浪速　山崎庄九郎
右刷人

紀伊國名所圖會

二編　海士那賀之部仲秋蒙兌
三編　伊都那賀之部　嗣
四編　有田日高之部
五編　牟婁郡之部　刻

江戸書林　須原屋茂兵衛
　　前川六左衛門
名古屋書林　永樂屋東四郎
京都書林　小川多左衛門
　　鉛屋安兵衛
　　帶屋伊兵衛
和歌山書林　糟屋仁兵衛
大阪書林　勝尾屋六兵衛
　　河内屋太助

小學正文　尾藤先生改点　素讀本新刻　全二冊

補正初學指南抄　毛利貞齋著　小本　全一冊

朱引指南唐ノ歴代要覽世一史大學經書詩文讀法皆南ヲ委ク載セ経文出所ヲ記シスベテ初學ノ為ニ載レ事ヲ集ム平學文ノ書ヲ別録禁中ニ行ハル、事スベテ是ノ記ス禁中宮殿闕說ヲハシ掖家清花羽林名家其外堂上官位昇進ノ次第八省ソレ〳〵ノ職掌ヲ詳ニシ諸侯ト任官ノ次第其外親王御門跡御格式官位神社ノ官職寺院八八宗九宗ソレ〳〵委細ニ記シスベテ官職ノ事并ニ唐官相當等クハシク記ス是ニ文章雅語桐江先生エラム所ニシテ五經及左氏傳ノ要語熟字ヲ拔萃シイロハカニノ見出スニ便利ナラシム詠物詩唐季嗣撰也終リニ附シテ詩家ニ便リス

韋注國語　千葉先生再校　全部六冊
同增注　大峯先生著　全部八冊
同明堂本　唐本翻刻　全部六冊
同定本　秦鼎著　全部六冊
同略說　松窓先生著　全部四冊
同律呂解　橋南谿著　全部一冊

大成左國字引　袖珍本　全一冊

此字引ハ文字撰リ易キタメ總畫ヲ以テ引カシム學左國ヲ讀ビ一欲スルニハ先アラカジメ此字引ヲ記得セハ開卷ニイタリテ必裨益アルノ書ナリ

考槃餘事　小本　全四冊

此書ハ唐土歴世書畫古法帖等ノ評論ヨリノ紙筆墨硯或ハ琴酒香茶蘭瓶凡家服御スベテ一切事物全ク備ル其眞或ハ眞偽精粗ヲ辨論シ或ハ製造試探脩藏ノ諸法ヲ委ク載ス實ニ實益好事家碎ニ必用ノ小冊ナリ

御書物所　前川文榮堂
大阪心齋橋通北久寶寺町　河内屋源七郎

国立公文書館
National Archives of Japan